

校友会報 118



工学院大学 KOGAKUIN UNIVERSITY

工学院大学のシンボルマーク・ロゴタイプ

目次

時代の変化に対応する工学院	水素吸蔵合金の結晶格子間隔から覗いた	お知らせ
南雲 芳夫	工学院大学	全国大会（東京大会）の報告
1	須田精二郎	19
学園創立110周年を迎えて	6	ジェームス三木氏の記念講演を聞いて
北郷 薫	学園だより	20
2	長嶋 秀世	全国大会記念誌の訂正
世界に通用するエンジニアへ	9	21
大橋 秀雄	支部だより	編集後記
3	11	21
シンボルマークに託して	総会開催のお知らせ	
大橋 秀雄	14	
5	事業計画（案）、事業報告、決算、予算	
	14	

●ごあいさつ



時代の変化に対応する工学院

校友会会長 南雲 芳夫

はじめに、昨年10月26日の全国大会東京大会が校友諸氏、学園関係の皆様のお陰を以て盛大に行われたことをご報告申し上げますと共に、学園をあらゆるところで支えてくれている一人一人の「心」に感謝したいと思います。《新宿テクノキャンパスで、全国2千名の大集会》の名の下に、本学園の新しい時代への意気込み溢れる新キャンパスにて、校友会の皆さんとご家族とが心の奥深くにある何か共通するものを確かめあい、友情を新たに、私達の工学院の今後の歩みに、希望と自信を実感できたことに、この上なく感動しながら愉快的な時間を共有できました。校友会九十数年の歴史に残る素晴らしい大会でした。ありがとうございました。

学園は、早くも新年度の諸準備につつがなく入っています。大学の受験者も我が工学院は前年度より増えていると聞きました。全国的に受験者の数が減っているにもかかわらず、このような嬉しい便りは、喜びとともに若者たちの次の時代への期待が本学園に託されているという緊張感をも引き起こします。北郷理事長、大橋学長の強力なリーダーシップの下に『ジャンプ21』5カ年計画がその第2年目に入ります。「明日に向かってのジャンプ」の着実な歩みが社会的に評価されてきていることの兆候であると、我が意を強くするのはもちろんですが、そこに留まるのではなく、やはり確実にその成果を若者達の目の前に示していただきたいし、工学院はそれが出来るものと信じております。

今日この頃、日本の社会が変わって来つつある、いや、変わらねばならない、と盛んに議論がなされています。私のような中小に過ぎない企業者の

立場からも、確かに、産業構造の大きな変動を実感しています。これは企業だけの問題ではなく、成る程、社会全体の問題なのでしょうし、特に若者の教育の面では是非とも考えねばならないことだろうと思います。一企業人の立場から言いますと、ある仕事の一部だけを担当できればよかったのが今までとすれば、これからは自分が今手掛けていることが小さくとも仕事全体に対する自分なりの考え方を持っていないとお客に喜ばれるものにならないということです。つまり、規格型大量生産・大量消費の時代は、要するに上手なコピーが生命ですから、分業の部分できちんと出来れば良かった。余りクリエイティブなものは求められていなかった。「変わらねば」というのは多分この部分なのだろうと思います。分業的思考ではなくて、自分の人柄全体を仕事の上に反映させていくことが求められていくのでしょうか。ソフト的な、サービスの要素が増大するという事はそういうことだと思います。企業が決まった方向性を持つことが出来た時代は社員を素材から教育していくことが出来た。だから学生は個性が余り強くない方が良かった。ところが、諸価値観が混在する時代は決まった教育の方針がもてませんから、教育の能力が企業にはないと言わざるを得ません。従って企業側の採用の形態も変わるでしょう。

工学院のこれからの教育が、このような時代の要請に十分に対応していけるものであることを祈っていますし、校友会としてもますます新しい工学院の成長に貢献できるよう頑張らねばと思いを新たにしております。最後に、全国の校友各位のご活躍を念じつつ、学園へのご協力をさらにもお願いしてご挨拶といたします。

●ごあいさつ



学園創立110周年を迎えて

理事長 北郷 薫

校友の皆様方におかれましては、ご健勝にてご活躍のこととおよこび申し上げます。

本年、平成9年(1997年)は、本学園が工手学校という校名をもって明治20年(1887年)に創立されてから丁度、110周年目の年になります。

思えば今から10年前の昭和62年(1987年)10月には、本学園は創立100周年を迎えて記念式典を挙行いたしました。その年の7月に、新宿校地再開発工事の第一期工事が着工されたのであります。同工事により平成元年(1989年)に新宿・高層棟新校舎が竣工し、同第二期工事により平成4年に新宿・中層棟新校舎とエステック情報ビルが竣工し、同第三期工事により平成7年に工学院大学エステック広場(公開広場)および同広場下の商店街等が竣工して全ての工事が完了いたしました。

本学園の創立100周年の年と、創立110周年にあたる本年との間の10年間において、新宿校地の校舎を現在の新校舎に建て替えたのであります。これらの工事は、同校地における本学園の教育・研究活動を継続しながら遂行いたしましたので、今では何時の間にかできてしまったという感じが致しますが、高層棟と中層棟およびエステック情報ビルができるまでの間は、教職員・学生諸君のご苦勞は相当なものでありました。とくに私が感動いたしておりますのは、新宿の新校舎を使用することはなく、不便な仮設校舎や一部移転先の両国

校舎で学んで卒業して行った大学学部や専門学校の学生諸君が「母校に新しい立派な校舎ができるためならば」と何の不平も言わなかったことです。その時期に本学園で学んだ校友の皆様も、全てが完了して新しい時代に向かって前進する本学園の姿を見て喜んで下さっていることでしょう。昨年の10月26日に新宿の新校舎(新宿テクノキャンパスの愛称があります)で開催されました校友会全国大会には全国から多数の校友の方々が、ご家族と共に参加されました。

本学園は、平成8年度から同12年度(1996～2000)までの計画を「学園5ヶ年計画-ジャンプ21」と名付けて、いま、その計画にしたがって全学園を21世紀へ向かって発展させるように活動を展開しています。今年あたりから、次第に「ジャンプ21」の成果が見えてくるようになると存じます。

どうか校友の皆様方におかれましては、本学園の大学院、大学学部、専門学校、附属高等学校、同中学校に対しまして、これまで通り、ご支援下さいますようお願い申し上げます。

私たちにとりまして、校友の皆様方が社会の各方面において活躍する姿を見ることは何よりの喜びであります。

校友の皆様方のご健勝とご活躍をお祈り申し上げます。



世界に通用するエンジニアへ

工学院大学 学長 大橋 秀雄

学園は創立以来110年、大学は開設以来48年を迎え、長い伝統を受け継ぎながらも新しい時代に対応すべく努力しております。少子化の傾向が一層進む中で、18才人口減少の影響が大学を直撃しています。その逆風にめげず、本学は過去3年連続して志願者数を伸ばし、健闘を続けております。これには、新宿新都心にそびえる新キャンパスの完成、全国の高校生を対象とする「理科・科学クラブ研究論文募集」や八王子の夏の名物行事「大学の先生と楽しむ理科教室」による知名度の向上、教職員一体となって進めてきた受験生対策などによることは勿論ですが、全国に広がって母校を支援して下さる校友の皆様を負うところが極めて大きいと思っております。ここに、日頃のご支援に改めて御礼申し上げます。

大学の現況については、北郷理事長のお話と重なるところもあると思いますので、以下日頃感じている技術者の問題について述べさせていただきます。

—エンジニア資格—

我が国で工学系の高等教育を受け、技術に関わる仕事をしているものを技術者と呼ぶと、その数はおそらく三百万人に達するでしょう。それらの人たちと名刺を交換する機会は多いのですが、まれに技術士と建築士と明示してある場合を除けば、相手が技術者かどうかは聞いてみなければ分かりません。

これに対し外国人の場合は、工学教育を受けて学士の学位を取るところまでは同じですが、その後エンジニアとしての正式な資格を取得するよう努力し、それを名刺に明示するところが違ってきます。アメリカの場合はPE（プロフェッショナルエンジニア）、イギリスの場合はCEng（チャータードエンジニア）、ドイツの場合はDipl-Ing（ディプロムインク）、ヨーロッパ27カ国で共通なEuro-Ing（ユーロイング）などが、公的に認知されたエンジニア資格の例になります。外国のエンジニアと名刺を交換された方はお気づきの通りですが、これらの資格が所属組織の肩書きよりも目立つところに記載されています。

我が国の技術者が外国のエンジニアと一緒に仕事をするとき、教育だけではどうしても越えがたいハンデがあります。それがこの資格の問題です。我が国では、技術者、技師、エンジニアなどの呼び方が明確な定義がないまま勝手に使われ、工学を学んだもの、あるいは技術的な仕事に従事するものといった程度の曖昧な意味しか持っていません。

医師、弁護士、公認会計士などは、我が国を始めほとんどの国では、国が法律によって規定し、公認された機関がこれを認定し、独占的な業務権が与えられる専門職業（プロフェッション）として認知されています。これに加え、外国ではエンジニアもそのような専門職業の一つと見なされて

おり、社会に対する責任の重さに応じて資格が認定されています。

我が国の技術者は、外国のエンジニアとほとんど同等の教育を受け、また同等以上の実力があると自負しながらも、国内では技術者としての正式な職業資格を得る機会に恵まれていませんでした。ボーダレスの時代を迎えると、日本の技術者が外国のエンジニアと一緒に仕事をする機会が必然的に多くなります。資格を持たない日本の大部分の技術者は、実力の違いではなく単に制度的な違いの犠牲となって、無資格者でも差し支えないような責任の低い仕事を任せられるか、あるいは資格を持つ外国エンジニアの下で働くことを余儀なくされる事態が起こってきます。いや、すでに起こっています。これはまさに悲劇的な状況であり、工学教育に携わるものとして看過することは出来ません。

—技術士—

我が国にも技術士という制度があり、これが外国のエンジニア資格に対応する正式な資格であるという反論もあります。確かに技術士は、技術士法によって規定される実務経験を満たし、難しいと定評のある試験に合格しなければ取得できない難関の資格です。しかし、技術士と外国のエンジニア資格が、果たして同じカテゴリーに属するかと考えると大いに疑問があります。

日本の技術士試験に合格して登録したものは三万人を越していますが、その数は工学系卒業生のおそらく1%程度でしょう。これは、イギリスの工学部卒業生が基本的にチャータードエンジニア資格の取得を目指すのとは根本的な違いがあり、両者を共通のカテゴリーで論ずることはできません。では、日本は極めて高度な技術者に対してのみ技術士の資格を与えているという主張はどうでしょうか。実はこの論も説得性に乏しいのです。

外国のエンジニア資格と我が国の技術士とを互いに同等な資格として相互承認する議論を始めると、技術士は守勢に立たされます。外国のエンジニア資格は大学における4年の工学教育を前提としているのに対し、技術士には学歴の規定がありません。高等教育を終えないものでも取得できる技術士は同等に扱えないという外国の主張に対し、我々は有効な反論を探しあぐねています。

—エンジニアの相互承認—

一昨年大阪で開催されたアジア太平洋経済協力会議（APEC）以来、人材開発問題が重要議題の一つとして取り上げられ、昨年のフィリピン会議でもその重要性が再確認されました。最初の具体的課題として、域内でなるべく早い時期にエンジニア資格の相互承認をするよう努力することが合意され、いまその準備がオーストラリアの主導のもと急速に進展しています。

エンジニア資格の取得には、教育、研修および最終認定の三段階があり、そのそれぞれの段階が、明かな質的保証のプロセスを備えていなければなりません。そのうち工学教育の質的保証のプロセスが、教育認定あるいはアクレディテーションと呼ばれるものであり、欧米の主要な国ではそれを実施する責任機関が決められています。アメリカのABETやイギリスのEngineering Councilがその中でも特に有名で、各国の見本となっています。ところが我が国には工学教育の品質を保証する組織がなく、外国から見ると日本の学生は無印の教育を受けています。いくら無印良品と頑張ってみても、旗色は悪いようです。

これまでの我が国では、個人にとっても企業にとっても、資格問題にほとんど無関心で済ませられました。企業が人材を有効に活用して競争力の高い製品を次々と産みだしてゆくには、本人の意欲と能力だけが問題で、資格の有無はほとんど意

味を持ちませんでした。エンジニア資格は、個人としての能力や倫理感を保証するもので、集団主義の社会にあっては、資格はむしろ異端者の目印とされる恐れすらありました。

このような風土の帰結としてか、我が国には、外国のエンジニア資格と相互承認するのに適切な技術者資格が欠けています。これに加え、教育の質を保証するプロセスについても、開設に先立って行われる文部省の設置審査を除けば、説得力のあるシステムを持ち合わせていません。エンジニアの相互承認が国際的に広がろうとしているのに、我が国は全く無防備の状態にあります。大学も産業界も危機の認識が希薄です。黒船はもうそこに来ています。

—孤立からの脱却—

我が国は、独自の制度・慣行によって、これまでは誇るに足る実績を挙げてきたと自負してきた

シンボルマークに託して

学長 大橋 秀雄

工学院大学の理念と理想を表すために、表紙に掲げたシンボルマークとロゴを新しく制定しました。広報用の印刷物を始めとして、封筒、便せん、名刺などあらゆる印刷物に愛用して、本学のイメージを社会に鮮明に印象づけてゆきたいと思っています。

シンボルマークを見ると、先ず毅然として立つブルーの太い柱が目立ちます。これは学生諸君一人一人が、爽やかにして深みのある自己(Identity)を確立して、将来先ず信頼される職業人として自立し、心豊かな家庭を築き、そして日本、いや広く世界を支える柱となってもらいたいという願いを現したものです。

斜めに走る6本のゴールドラインは、スクー

が、至る所で「気が付けば孤立」の状況が続出しています。このままでは、大多数の工学系卒業生は、職業資格や教育認定と縁がないままボーダレスの時代に乗り出し、世界各地で苦戦を強いられることになるでしょう。内を向いて教育の質を向上させる努力はもちろん必要ですが、そのように苦心して育てた学生が、国際舞台でもそれなりの扱いを受けるよう体制を整える仕事も、また火急を要することと思われまます。21世紀の開幕までに、内に向かっても外に向かってもなすべきことは余りにも多く、心が焦ります。私の任期もやがて二期目に入りますが、学長としての仕事の傍ら外向きの仕事にも力を注いで、学生たちが生き生きと国際的に活躍できる基盤を整えたいと思っています。

ルカラーのブルーと鮮やかなコントラストをなして、光と躍動感をもたらしています。この光の筋は、学生諸君が様々な分野の知識を学び取るインプットラインであり、また将来学生諸君自身の見識を社会に放射するアウトプットラインでもあります。そしてそのような理想の人間像が、全体として本学のイニシャルKを形作っています。

ブルーの柱は、また大学自身のIdentityでもあります。本学が、個性豊かな人材を育て、幾多の創造の成果を生みだして、社会に文化・文明の光をあてる存在となることを目指しています。

● 論説



水素吸蔵合金の結晶格子間隔から覗いた工学院大学

工学院大学 環境化学工学科

教授 須田 精二郎

昭和48年(1973年)の4月に本学に着任してから23年が過ぎました。「ここが君の研究室だ」と言われて連れて行かれたのが、八王子校舎の体育館脇の機械実験棟にあるうなぎの寝床のような倉庫の一角でした。廃棄物の山に囲まれ塵の積もったスレートとベニヤ張りの小さなスペースにほどなく机とロッカーが運び込まれて私の工学院大学での生活が始まりました。母校の都立大学での恵まれた環境からの突然の変化にただ呆然とする日々が続いたのも今は昔のこととなりました。

当時、オランダのフィリップス研究所で見つけられたばかりの「水素を吸う金属」を縁あって手にすることができたことから私の研究が始まりました。2年ばかりの間の母校での実験研究に明け暮れる日々は、八王子での惨めな思いを払拭するに余りある興味と興奮に満ちた時代でした。「水素を吸う」金属についての研究は、当時まだ始まったばかりの新しい分野のことで、内外には数えるばかりの研究者しかいない状況にありました。第一次石油ショックの頃、通産省のサンシャイン計

画がスタートし、新エネルギー技術開発計画の中に「水素を吸う金属」、今日では「水素吸蔵合金」と呼ばれる水素貯蔵材料の研究もこの計画の中に含まれておりました。

僅かな研究費で細々とやりくりしていた頃、工業技術院と東京工業技術試験所(現、物質工業工学研究所)からの支援や新技術開発事業団(現、科学技術振興事業団)を介した積水化学工業の委託研究の開始は、後々の新しい研究体制の構築につながる貴重な体験となりました。この未踏の分野では全くの素人である私にとって、国家プロジェクトであるサンシャイン計画や委託・共同研究相手企業の掲げる開発目標はいかにも困難に満ちたものであり、毎日が能力の限界との戦いのような日々でした。この何もかも貧弱な研究室に企業研究者や技術者が入れ替わり立ち替わり頻繁に出入りする状況の中で、徐々に研究設備や機器が増え、研究成果も少しずつ蓄積されるようになってきましたが、大学での基礎研究と企業の研究開発の間にか何欠落している部分があるのではないかと感



写真の装置は、通産省工業技術院(新エネルギー・産業技術総合機構-NE DO)の平成7年度提案・公募型最先端研究分野委託研究「傾斜機能型複合機能を表面にもつ水素吸蔵合金の開発とエネルギー変換機能」(総額1億1千6百万円)の研究用に購入したESCAとかXPSとか呼ばれている最新鋭の光電子分光分析装置、(島津/KRATOS AXIS-HS)。この研究に共同研究者として名前を連ねた門間先生(応化)と大倉先生(応化)が、走査電子顕微鏡(日立、S-2400)と非線形光学効果測定装置(東京インストルメント、SL-904)を、また長本先生(化工)はX線回折分析装置(マックサイエンス、MXP3 V)をそれぞれ取得された。当研究室では、この研究で取得したXPSとシーケンシャル高周波発光分析装置(ICPS)に、以前から保有しているものを合わせて各2台を保有することとなった。現在、これらがフル稼働している。

じ始めたのもこの頃です。

研究成果を初めて発表したのは、1977年にノルウェイのイェイロで開かれた水素吸蔵合金の初の国際シンポジウムでした。今ではこの時に交流の始まった研究者との関係が一層広がりを見せ、国際的な共同研究、とりわけ若手研究者の本学への受け入れにまで発展しています。本学に客員研究員規程が定められたのを契機に数多くの研究者の受け入れが始まりました。内訳は、ドイツ(1)、スウェーデン(2)、スイス(1)、ソ連(2)、ロシア(2)、米国(1)、韓国(1)、中国(8)などで、スイスのETHからは2名の熟練技師の派遣もありました。ここでの研究によって学位を取得した客員研究員も5名を数えます。シュツトガルト大学(原子力および熱エネルギー研究所)から派遣されたM・ナーゲルは、学位取得後ティッセンに入社し、現在はティッセン・レーザー開発会社の社長として活躍しています。王相龍(南開大学)は学位を取得した後、松下電器中央研究所で後進の指導に当たっています。

話は本学が100周年記念事業を進め始めた頃のことですが、八王子キャンパスに研究棟の建設計画が持ち上がり、多くの研究室の移転に伴い私の研究室もこの計画の中に含まれることになりました。「水素を扱う」研究室ということで、7号館としての独立棟の建設が予定され、消防法による厳重な防災設備が設置されることになったのです。恐らく、今でも全国の大学研究室の中では、防災面で最高の設備が設置された数少ない例ではないでしょうか。

5号館用の冷暖房システムとして、建築学科の中島教授のグループの太陽熱・土中蓄熱方式と私どもの水素吸蔵合金による夜間電力貯蔵方式の二つが、この記念事業の中で実現することになりました。多額の資金を要し、未だ開発途上にある新方式の採用に踏み切った当時の常務理事会の英断があったことを何時までも記憶に留めて置きたいと思っています。

この頃、研究の内容は多岐にわたり規模も拡大され、内田助手(現、講師)と2人の教員の事務

処理能力は既に限界に達してきた丁度その頃、冷暖房プラントの発注/受注のことで連絡業務に当たっていた常務理事会と三井物産(鉄鋼原料本部)との間で大学の研究成果の産業技術化への橋渡しを役割とする研究開発会社の設立構想について話し合いが進んでいたのであります。当時、プラント・エンジニアリング会社として参画していた日本化学技術、特殊フィルター製造会社の富士フィルター工業、私の研究室との関係で水素吸蔵合金の開発の始まった日本重化学工業と中央電気工業、それに個人的な研究資金の調達で支援を得ていた横浜銀行など7社がその設立に参加し、資本金7千5百万円の水素エネルギー研究所が昭和61年に設立されたのであります。その設立に至る経緯の中で、本学の常務理事会の果たした役割は多大なものであります。当時の高山理事長、北郷学長、富子・松浦の両常務理事、友石、松木の両参与を初め、三井物産の土川部長(現、三井物産副社長)と青木課長代理(現、三井物産ネクスト社長)の諸氏のご尽力によって実現したのであります。その後の経緯についても少しだけ触れておきますと、第三者割当増資によって資本金は2億9千5百万円となり、銀行、生命保険、証券など新しく16企業の参加を得たのですが、私には、大学を代表するシンボリック存在と個人的債務保証義務が主たる役割となっています。

ところで、大学での研究や開発(R&D)を企業における開発研究や技術開発(D&E)と混同して理解することは避けなければなりません。よく「産学共同」という言葉が聴かれますが、その中で大学の役割は、あくまでも基礎研究面での寄与に絞って考えるべきです。

私がおこなったような新しい研究開発会社構想に賛同して加わったのは、充実した基礎研究を安定した環境の中で存分に実施できればという一念からであり、企業の開発行為への直接的な参画を意図したものではありませんでした。どんな状況の中でも大学研究者の役割は基礎的研究に深化しつつもその産業技術化に想いをはせることが大切だと考えています。

さて、最後に着任以来23年を経て今日に至る間に心の中に定着しつつある本学についての考え方を簡単にまとめておきたいと思えます。いろいろと考えることがあってもこれを開陳する機会もなく、最近ではその勇氣もなくなりました。110年を越える歴史は、敷き詰められた鉄道路線に例えることが出来ます。本学には、過去に2回の分岐器が設置されて単線が複線化し、電化された時期があります。一回目は、先達の英断によって八王子に広大な敷地を求め、八王子キャンパスが得られた時、また、二回目は、新宿キャンパスの全面撤退案を退け百周年事業として高層ビルによる再開発を行って八王子に5号館群が建設された時です。

従来通りの2部の再開、名前だけの(バーチャルな)総合研究所の発足、大小取り合わせて40を越える委員会の存在、それらの改組や情報ネットワーク処理による効率化の動きの鈍さ、関係者全員参加を旨とする各種の会合、将来に対する明確な展望の低さ、平等を旨とする慣例的取り決め、研究・教育評価に優先される学内行政手腕への評価の高さ、新しい動きに対する無関心を装った無視、など数え上げて行く内に暗澹たる気持ちになります。本学の鉄道路線の先には終着すべき駅があるのか、あるいは、先のレール敷設のことは成り行きに任せて方向が勝手に決って行くのか、途中駅の建設やその中身をどうするのかなど、経営や学内行政に参画されている先生方の手腕に期待する他はありません。

なお、本学の経営に関連して一言疑問を呈しておきます。(1)本学の収支源は、学生納付金と私学

助成金や文部省補助金が全てと言える状況です。学生納付金は換言すれば収益金であり、助成金と補助金は別段とすべき補助収入です。学生納付金は学生数に比例しますから入学者が減れば増額(値上げ)しなければ収支が合わなくなります。補助金は年々必ず増えるものとして収支の均衡に資する性質のものでしょうか。(2)収益の源の一つと考えられる公開講座を無償で開く理由は何なのでしょうか。大学の持つ知的資産は如何なる状況のもとでも無償で提供すべきものなのでしょうか。収益事業は大学が行うべきものではないとすると納得が行きますし、お金を支払ってまで聴講する人は少ないとしても納得が行きます。(3)バーチャルな研究所は、何時頃実態のあるものに変化するのでしょうか、時限的に離合集散の可能な研究実施場所として、内外の研究者が集うことの出来る研究施設を設けることは出来ないのでしょうか。(4)暇と時間のかかる会合を減して、学内イントラネットのような情報交換システムを取り入れ、情報を共有しつつ関係者の提案や意見の集約をはかることは出来ないのでしょうか。(5)情報センターとして機能の集中が始まっている新宿地域で、新宿校舎を24時間オープンな新しい大学・大学院や社会人教育の場所として生かすための計画は着々と進行しているのでしょうか。本学にはいろいろなレベルでの将来計画委員会がありますが、ここで私が勝手に危惧しているようなことは先刻承知のこととして実行に移されていることを祈願しつつ、校友会諸兄への私からのメッセージとさせていただきます。

略歴および学術活動

略歴：昭和12年10月(高知市生まれ)、昭和42年3月東京都立大学大学院(博士課程終了、工学博士)、昭和42年4月同大学工学部助手、昭和48年4月本学化学工学科講師を経て現在、環境化学工学科教授(研究分野：熱力学物性および金属水素化物の物性と応用)、担当講義：基礎物理化学第一(1年生)、化学工学熱力学第一、第二(2年生)、エネルギー化学工学(3年生)、化学工学セミナー(3年生、分担)化学工学物性特論および化学工学熱力学特論(修士1年)
学術論文：英文論文101報、邦文論文(工学院大学研究報告を含む)：103件、口頭発表171件、招待および基調講演など65件、著書および監修書17件。
学術活動：国際会議委員長(1982年、1994年)、国際委員(14件)、(財)化学工学特別研究会代表幹事、招聘研究員(大工研、東工試、化技研)、客員教授(シュツトガルト大)、客員研究員(東大、先端研)など。
その他の活動：通産省産業技術審議会専門委員(水素部門)、(財)大阪科学技術センター幹事(水素吸蔵合金利用開発研究会、他)、(財)道路建設技術センター委員(道路新技術懇談会)、IEA(国際エネルギー機関)TASK-12(水素貯蔵・輸送部門)委員など。
趣味：園芸、オーシャン・フィッシング、ジェットスキー、ヘリコプター(FAAライセンス)、陶磁器(古伊万里、鍋島など)/漆器(輪島、春慶など)、絵画/彫像、初期浮世絵(鈴木春信他)、ワイン(ボルドー/ブルゴーニュ/ワシントン)などの収集。

● 学園だより

学園のさらなる発展のために

学務・企画担当常務理事 長嶋 秀世

工手学校として築地に誕生した本学園は1887年の創立から、今年度で110周年を迎えます。この間、関東大震災による校舎の消失、敗戦と戦後の混乱など幾多の困難に打ち勝ってまいりました。そしていま、すでに始まった18歳人口の激減期を乗り切り、さらなる発展のために、大学、専門学校、高等学校、中学校は、それぞれテーマを掲げ努力を重ねています。

ここでは学園と学園を構成する各学校ごとにその活動を紹介します。「学園だより」とさせていただきます。

法人

学園の広報に関しては、卒業生の皆様からいろいろなご意見や要望が寄せられています。この中でも特に、本学園の広報活動に関するものが多くあります。皆様からの貴重なご意見をもとに、積極的に広報活動を行うこととし、この一環として、すでにご存じのように、大学の理念と理想を現すための、ロゴマークを制定しました。(表紙を参照)

この意味付けにつきましては、紙面の都合で省きますが、本学のイメージを社会に鮮明に印象づけていくシンボルとして活用していきたいと考えています。

さらに外に向けた積極的な活動として、ごく最近の例を掲げますと、

八王子学園都市センターにて4月12日、大橋学長が講演を行います。これは八王子市内に21校ある大学、短大、高専と八王子市との共同事業の推進を担う施設であり、地域に密着した本学の姿勢を示す絶好の場でもあります。

また、「夢科学'97 CGグランプリ」を本学の主催、文部省、科学技術庁、産経新聞社、フジテレビジョン、日本教育新聞社の後援により開催し、この展示を3月7日から9日まで新宿校舎にて行ないました。なお、この展示に先立つ3月2日にはフジテレビにて、この催しを紹介する番組が全国ネットにより放送されています。

このように、外に向けての広報活動をさらに活発にす

ることにより、学園の知名度およびイメージの向上を図り“大学冬の時代”を乗り越え、学園がさらに発展していくための活動をおこなっていく所存であります。

大学

平成9年度大学入試の志願者数は、本学と同規模の大学では減少傾向にある中、本学においては前年の志願者数(17,563人)を若干上回る見通しです。3年連続して受験者数が増加しているこの現象は、他大学ではみられない快挙であり、水野宏道教務部長の強い情熱と、これを支えた事務当局の努力の賜物でもあります。

ご承知のように、18歳人口は平成4年度をピークに減少し、平成21年度まではその傾向が続くと予測されています。このため、多くの大学が多様な入試戦略を核として、内なる整備と社会に向けた諸策を展開しています。

このように厳しい私学の状況下にあつて、本学もまたいくつかの政策を標榜し、次に示すような具体的なプランニングを推進しています。

◆教育研究を支える環境の整備

新たな学習需要に応えるために大学院を充実し、また、社会人技術者・研究者への再教育の途を開くため、企業等に在籍したままで入学を可能とする「昼夜開講制」および「特別選抜制度」を実施します。

また、本学および芝浦工大、東京電機大、武蔵工大による、東京理工系4大学において学術・教育の交流に関する「協定書」の締結をおこないました。更に、地域社会に向けては、理科教育における実験・観察を通じた創造性や自主性を涵養するための「理科・科学論文の募集」、「理科教室」などの催しを開催しています。これらの施策は好評の裡に定着し、開放度が高い大学としての評価を得ています。

一方、研究活動においては、外国における研究発表の助成が平成7年度で22件、また、文部省科学研究費補助

金が30件採択され、受託研究費も31件と増加し、研究活動においても着実にその成果を上げています。

◆学科・コースの新設計画

21世紀の国際社会を先導する技術者の養成を目標に置き、Global(国際化)、General(総合化)の二つの特質をキーワードとした教育課程により、新しい学科について基本構想案の検討が進められています。

現在、検討されている学科としては、「情報工学科」(入学定員110名)の新設があります。また、都市および環境に係わる理論と実践を具現化するための、総合デザイン教育を眼目とする「建築都市デザイン学科」(入学定員70名)、更に、グローバルエンジニアの育成を目的とした「国際工学コース」(機械工学科の定員の内50名程度を同コースに充てる)などがあります。いずれも計画案の段階ではありますが、平成9年から平成10年の間にその全容を関係者に示し、設置認可申請に至るよう努力したいと考えています。

専門学校

専門学校への入学志願者数は長期低落傾向にあり、これに歯止めをかけ、さらに上昇に転じさせることが急務の課題となっています。

このため、学生募集活動の活発化を図ることとし、「学生募集委員会」を設置して活動計画を定め、教員・事務職員により高等学校への訪問を実施しました。

さらに、平成9年度では募集経費を大幅に拡大し、高校教員を対象とした学校説明会の開催、また、来校した入学希望者へキャラクターグッズを配布することなどを計画し、知名度のアップを図ることとしました。

◆職業人再教育事業の実施

社会に開かれた学園、また、専門学校としてアピールするために職業人再教育研究会を組織し、「木造住宅の耐震総合展」を実施し、また、「木造住宅の耐震性再考」についてのセミナーを実施しました。なお、職業人再教育研究会は北郷理事長を会長とし、専門学校教職員、大学教員、日本工業新聞社、専門学校新聞社などにより組織され、今後は、夜間を利用した短期講座の開設なども併せて実施していくことを計画しています。

◆学生サービスの向上

学生サービスの向上を計るため、製図教室の照度アップ工事を実施したほか、東京都私立学校教育振興会から

の補助金を受け、図書室の蔵書整備を図りました。また、就職相談室では、企業訪問により新規企業への求人の開拓に務め、前年度比3割ほどの求人数の増加が図れました。

このような施策により、在学生へのサービスを向上させ、入学志願者の増加につなげるべく努力を行なっています。

付属高等学校・中学校

高等学校ではコンピュータを利用したMM教室の整備を行なった他、高等学校に隣接した敷地、2350平方メートル(711坪)を購入しました。この敷地の利用については高等学校・中学校の教育の向上に資するものとして、その利用を検討するところであります。

昨年開校した付属中学校では、「多感な時期にある中学生に対し「実りある体験をさせ」「人間性の育成につなげる」との考えにより、「体験学習」を重視した教育を実施しています。さらに中高一貫教育、また、付属校ならではの「ゆとり」など、学園としての総合力が評価されたためか、入学希望者が定員に対して1次試験で6倍、2次試験においては24倍もの競争率となりました。この傾向は、本年度においてもほぼ同率であり、今後の発展を期待されるものであります。

■おわりに

学園の発展には、卒業生の団結と学園に対する力強いバックアップが不可欠です。学園百年史によれば工手学校創立当時の「校友」は、「本校ノ創立ニ功労アリタル者」あるいは「本校ニ功労アリタル者」とされていました。いま、卒業生の皆様は創立当時の「功労アリタル校友」から「卒業生としての校友」として、その歴史を引き継いでいます。このような歴史を背負い、また、かけがえない学園を、未来に向かって発展させるため、卒業生の常務理事として、さらなる発展の礎になりたいと念じています。今後とも皆様からの暖かいご指導、ご支援をお願い申し上げます。

おわりにあたって、業務繁忙の中、貴重な時間を割き本稿の資料を作成いただいた、大学教務部事務部長 鶴巻義弘、専門学校事務課長 清水哲夫、中学・高校事務長 阿部正則の各氏に紙上を借りて感謝を申し上げます。

●支部だより

平成8年度に開催された支部総会は33支部でした。開催にご尽力頂きました支部長ならびに、幹事の皆様に感謝申し上げます。また、紙面の都合上掲載出来ませんが新年会、花見、地区別分科会等々各支部ごとに趣向をこらしたイベントを開催する支部も増えてまいりました。

平成8年度支部総会開催状況 (97年2月現在)

清水建設支部 4/10	清水建設内	山形県支部 7/6	山形市 後藤又兵衛旅館
岐阜県支部 4/13	岐阜キャッスルホテル	千葉県支部 7/7	千葉市 ちば玉姫殿
山口県支部 4/14	宇部市 国際ホテル宇部	青森県支部 7/27	青森県 民宿「さかした」
栃木県支部 5/19	宇都宮市 ホテルニューイタヤ	富山県支部 7/27	富山市 高志会館
広島県支部 5/19	広島市 ますみ	島根県支部 9/14	浜田市
岩手県支部 5/25	盛岡市 労働福祉会館	長野県支部 9/14	上田市 ささや
大阪府支部 6/1	奈良市 猿沢荘	北海道支部 9/14	札幌市 KKR札幌
宮城県支部 6/1	仙台市 東北学院同窓会館	兵庫県支部 9/28	神戸市 六甲荘
東京中野支部 6/14	大学ファカルティイクラブ	八南支部 10/5	八王子労働会館
山梨県支部 6/21	甲府市 シティプラザ紫玉苑	香川県支部 10/6	高松市 高松グランドホテル
東京新宿支部 6/22	新宿校舎	東京都支部 10/26	新宿校舎
埼玉県西支部 6/23	東松山市 紫雲閣	鳥取県支部 11/2	
熊本県支部 6/23	熊本市 産業文化会館	新潟県支部 11/3	新潟駅前 安兵衛
愛知県支部 6/29	名古屋市 メルパルク名古屋	大分県支部 11/23	大分市 豊後灘
高知県支部 6/29	高知市 魚竹	京滋支部 12/14	京都市 法華クラブ
東芝支部 7/5	新宿校舎	福岡県支部 1/27	福岡市
神奈川県下5支部 7/6			

支部よりお送りいただいた写真ご紹介



96.7.7 千葉県支部総会 於 ちば玉姫殿



96.6.23 埼玉県西支部総会 於 東松山市紫雲閣



97.1.24 福岡県支部総会 於 福岡市ワシントンホテル



96.8.17 京滋支部懇親会 於 京都鴨川「京町」



95.10.7 鳥取県支部総会 於 三保五本松

平成9年度支部総会開催予定 (2月20日現在連絡受付分)

支部名称	月日	開催場所		
清水建設支部	4/8	清水建設本社	東芝支部	7/4 新宿校舎
東京中野支部	4/12	大学ファカルティイクラブ	神奈川県下5支部	7/5 藤沢グランドホテル
山口県支部	4/20	徳山市 サンルート徳山	千葉県支部	7/6 ちば玉姫殿
日本電気支部	4/23	NEC芝クラブ	東京新宿支部	7/26 新宿校舎
栃木県支部	5/18	ホテルニューイタヤ	北海道支部	9/13
岩手県支部	5/24	盛岡市 労働福祉会館	青森県支部	9/27 八甲田山ホテル城倉
愛知県支部	6/7	名古屋市内	東京支部	9/28 新宿校舎
宮城県支部	6/14	仙台市 東北電気会館	鳥取県支部	10/25 倉吉市
島根県支部	6/14	浜田市	新潟県支部	11/1 月岡温泉 冠月
八南支部	6/15	高尾山口琵琶家	長野県支部	12/6 上田市
埼玉県西支部	6/22	東松山市 紫雲閣	沖縄県支部	11/21 沖縄県 パシフィックホテル
高知県支部	6/28	高知市 魚竹	福島県支部	11/下旬
大分県支部	6/28	大分市 豊後灘	長崎県支部	12/初旬

支部活動について

埼玉県西支部
支部長 谷口 弘明

1. 当支部の創設

昭和45年3月22日に参加者21名、川越市いずみパーラー（現在は倒産）にて。

初代支部長、大友健一郎氏の音頭にて長沢一男氏と私の3人で、数回の会合を開き、ときには大友氏の自宅まで行き、本部より落合康男様が見えられ、大変に骨を折られて、全国60番目

支部総会の参加状況

回数	開催年月日	参加者数(名)
設立	昭和45年3月22日	21
2	昭和62年10月4日	10
3	平成3年6月16日	24
4	平成4年6月14日	24
5	平成5年6月13日	28
6	平成6年5月29日	25
7	平成7年6月11日	32
8	平成8年6月23日	32
9	平成9年6月22日	—

参加促進への取り組み状況

回数	往復ハガキ(枚)	回収(枚)	回収率(%)	返品(枚)
初	300	64	21	5
2	210	69	33	20
3	300	149	50	10
4	205	124	60	1
5	200	135	68	6
6	200	100	50	6
7	200	107	54	13
8	200	110	55	8

に誕生したのであります。

大友健一郎氏は、その一回のみで他界され、その後を引き継いで、私がやっておりますが、当時からの参加者として、現在副支部長の北田住夫氏、浅賀邦雄氏、長沢一男氏と横瀬克孝氏などもおられます。

2. 支部活動での問題点

- 往復ハガキの回収率を如何に高めるか。
- 参加者への継続をはかる取り組み等。
- 魅力ある会にする為に女性への参加を呼びかける。
- 会の運営費をどうするか。
- 他支部との連携をはかる工夫。
- 内容の充実をはかる為に毎回少しづつ変化させている。
例えば講演会を取り入れたり、ゲームを折り込んだり、賞品を出したり等。
- 名簿の整理

平成7年と8年の夏休みを使って、アイウエオ順に全会員約2700名をつくり上げる。

- 会員相互の親睦化をはかる。

社団法人 工学院大学校友会

第52回評議員会 第41回総会 開催お知らせ

会長 南雲 芳夫

日時 平成9年5月25日(日)12時30分～16時

場所 工学院大学 新宿校舎3F
0312教室 大階段教室

議案 第1号 平成8年度事業報告、収支決算報告並びに財産目録承認の件
第2号 平成9年度事業計画(案)並びに収支予算(案)承認の件

(注1) 本誌に同封の郵便はがきにより、折返し出欠の有無をご回答ください。

はがきには、50円切手をお貼り下さい。
(注2) 施行細則第13条により、当該議事について意思表示のない場合は、同意の意思表示とみなして、出席者数に加えることができますのであらかじめご了承下さい。

総会当日のプログラム

受付 工学院大学3F 12時より
挨拶 会長・学園理事長 12時30分より
講演 永井路子氏 13時より
表彰式 東京大会会長・優秀学生 14時30分より
議事 総会・評議員会同時開催 15時より
近況報告 学長・校長
懇親会 28F 16時30分より

講演 永井路子氏
演題 「元就の語りかけるもの」
プロフィール

第52回直木賞(1965) 女流文学賞(1982)
第32回菊池寛賞(1984) 神奈川文化賞(1984)



第22回吉川英治文学賞(1988)
第48回NHK放送文化賞(1997)を受賞
現在のNHK大河ドラマ「毛利元就」は歴史小説全集所収の「山霧」及び「元就、そして女たち」によるもの

平成9年度事業計画(案)

9年度の事業は、例年の通り優秀学生・生徒の表彰、学生・生徒活動の援助、支部長会の開催を行います。また、昨年より引き続き100周年記念誌の編纂を平成11年まで行ないます。講演会は、例年の通り、5月25日(日)の総会当日に開催します。

広報部では、新たな事業として出版事業が可能かどうか、調査・研究を続けて行きます。

次に、時代の要請として、校友会にインターネットを接続し、ホームページを開設するよう要望があります。現在、学園に回線の引き込みおよびサーバーにエリアを

拝借方を、申請しています。許可が降りればホームページを開設する予定です。これが実現しますと本会の大きな支出をしめる、会報の発行方法が変わる可能性もあります。

昨年、大学の同窓会では、一部の会を除く会員名簿がCD-ROMで発行されました。CD-ROMは容量が大きいので、ほんの一部しか使用していません。全会員を書き込んでまだ余裕があります。次回の名簿発行に際しては、校友会主導で、名簿だけでなく、他に何をを入れるかを研究して行きます。